

Title	保健・医療の国際協力
Author(s)	中園, 直樹
Citation	大阪公衆衛生. 1994, 66, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83790
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

わが国の保健・医療分野の国際協力 を考えてみると、国内の在日外国人の 受療のシステムの未整備など身近な問 題も山積している。ここでは、特に開

発途上国との関わりで、わが国が途 上国の保健衛生上 の諸問題に何がで きるであろうか、

回転扉

を考える上で、保健・医学・医療の教育に携わる者(公衆衛生学)として国際協力上の問題点を述べさせて戴きたい

筆者は大学院の4年の時、西アフリカ のセネガルのパスツール研究所滞在時プ に約2カ月、その後学会の度に、タイのバンコック、フィリッピンのマニラのいづれもスラムの保健所で保健所活動の1週間研修に参加したことがある。

昨年からはフィリッピンのネグロス島 への医療奉仕に参加しているが、これまでの偏った私

体験から意見をのべさせていただき、 皆様と一緒に考えていきたい。

途上国も経済発展が進むにつれて、 一部では成人病、公害病、事故、薬物 依存などの疾病も増え疾病の二重構造 を示しはじめたところもあるが、まだ

保健・医療の国際協力

関西医科大学教授(公衆衛生学)

中園直樹



まだ高頻度の疾病は、予防接種の普及、 安全な飲料水の確保、栄養改良、居住 周辺の環境改善などで予防が可能な 患である。それには社会的基盤として の保健教育の普及が必要である。それ と民族の存亡と宗教に深く関わりに るだけに大問題である人口問題に対の する家族計画と母子衛生である。 イマリヘルスケアそのものである。

ならない。この人は現地に比較的長期 滞在できる人でなければならない。私 の様に、すぐ帰って来るようではいけ ない。セネガルでのコルネット博士の 様に10年ジャングルに住み着けとは言 わないが…。

振り返ってみると改善されつつあるが、わが国には語学の教育に、また職場では長期滞在に不向きな制度がまだまだ残っている。医学・医療教育上では欧米留学・高度先進医療の修得ばかりに眼を奪われ勝ちである。

途上国の現地の風土、文化、国民性に学ぶことの多い保健・医療協力にどしどし出かけて行き、責任と義務を立派に果たすことの出来る公衆衛生の専門家を一人でも多く育てることができれば本望である。culture「文化」とは cultivate「育成する」ということである。